

9

2012

2012年10月号

日本のお手玉の会「東京支部」の皆さんも紹介されています。



歌いながら踊り、お手玉の技を見せる「お手玉演舞」の練習の様子。この日、歌われていたのは「アルプス一万尺」。数少ないという、男性会員さんも生き生きと参加していた。

「お手玉のある場所には
 みんなの笑顔があつて、
 人のぬくもりがあつて、
 新しい出会いがあるの」



「お手玉に再会して、
 人生が豊かになったと思うわよ」



雲子さん（右から4番め）と東京支部の皆さん。世田谷区周辺に住む方たちを中心に、総勢20人くらいの会員がいるそう。皆さん、明るく、元気。お手玉への愛と情熱にあふれていた。

子さんのもとに、全国展開するから参加してくれないかとお誘いがあったのです。「最初、お声がかかったときは、「はい。わかりました」って、わりと冷静にお答えしたのね。地元で貢献できるならって。それがね、後からちりめんのお手玉が5つ送られてきて。それを見たらね、もう、だめめろめろ。お手玉の思い出が、一気によみがえったの。そのきれいな5つのお手玉は、大切にしまいい込んでいたら、全部やられちゃった、虫に。きれいに食べべになつて。もう、悲しかったわあ」

雲子さんには、幼いころ、お手玉に夢中になって遊んだ思い出があるそうです。お母様に作ってもらったお手玉を持って近所に遊びに行き、お手玉好きのお姉さんたちに教えてもらったり、学校の休み時間に友達と、寸暇を惜しんで遊んだり……。お裁縫を習う小学校4年生になると、自分で作るようになったそう。「布はみんなお古。着物とかお布団の余りぎれよ。とにかく新しいきれいなもらえませんよ、私のころは。中に入れるお豆ももちろん虫食いよ」